



江見水落原稿  
水雷艇

本間文庫  
文庫 14  
A133



十四行  
三十字

二号

水雷艇

三号

に貝水陰



其の北洋艦隊全滅の時、威海衛の湾内深く  
 潜んで出でて戦ふの勇氣無く、唯防材と砲臺を  
 備へて、其日暮しの敵があるを待たず、彼が會つて  
 來りて大氣を吐いて、丁提督の揚る定遠鎮遠  
 の前路を思へば、息を以て氣を盡す。昔は上見ぬ  
 今は籠中の鳥。

記憶を難れぬは彼が如何に剛愎の權座の港へ入る  
 其時の感情である。 然れども日本を呑むるもの如く徳を本牧  
 の沖に碇をとり、 斬て我朝野の名をせしめ、 自由を見  
 物せしめ、 好む。 余も亦中より一覽し、 嗚呼  
 定遠、 鳴呼、 鎮遠、 鳴呼、 大なる事、 聖なる事、 之を  
 執るに勝得べき、 勢艦が我らある大石の点を以て  
 て見る見、 以て時を、 余は撫然として歎じた。  
 然れども、 一朝甚海にその彼の午を聴く、 其時を、  
 全く買取りとて事なを發明して、 俄に彼に向つての

2  
 恐怖の念が立つた、 と同時に、 我の勇氣も破れ、 其の  
 如く歎き、 何と云はば、 其れは一生の事なる事  
 とも、 大女者(と)と云つた。 古連、 旅順、 港、 威海衛  
 以来、 我軍の難水電報を無事とて、 幾度となく  
 偵察に向ふ、 敵艦を遠くから進んじが、 實に以て平素  
 志物を、 裁制の、 其のあを、 同然と感ありた。  
 其時、 水兵の、 左うだ。  
 いや、 水兵が、 又敵艦を、 輕く、 事は非常なり、  
 申す、 物とは、 彼ら、 平時は、 彼を、 危し



只一本を引出さるる落ちて居るものなりては、誰か左と  
思はずい。今此水戸船の少くもなすつて山の如く  
高の如く、大なる一室を築き、  
とある、道理は終て出さる、室内に於ては、  
出さるるとは、知つて居る、何んが、虚言の様を著す  
様で、私ども後、立ちまをりて、  
何んが、大なる、素より死ぬ覚悟である。命令  
を受け、我然に帰つて、お前を乗組一同は、語つた時  
は、~~お前~~水戸船長は、命令を命のけに、時より、  
日々と無造作であつた。此の平氣を、  
死ぬ所行くところ、平氣を知らぬ、それを、  
平氣お前のは、明かす見えたり、死ぬ、  
ある事。  
余は、平氣の言ふ、若し、  
書けと。かし、  
如何に死ぬの如く、遺書を書く、  
言つて居る。急ぎ、  
左とて、  
を言つて、  
水戸船長、

死ぬ所行くところ、平氣を知らぬ、それを、  
平氣お前のは、明かす見えたり、死ぬ、  
ある事。  
余は、平氣の言ふ、若し、  
書けと。かし、  
如何に死ぬの如く、遺書を書く、  
言つて居る。急ぎ、  
左とて、  
を言つて、  
水戸船長、

出乗りぬ。別離の憂を  
仕様の無い程に  
軒を揺りて居る。  
夜と向つた。月はず終るを待つて  
方黒く、暗々砲音を聞くのみだ。  
見えずみ。  
是早や自由の念を解いて、  
世の中は起す。即ち、  
水兵は起す。  
甲場の吹子

スタンションを打ち、ロープを解き、  
令塔を陥めしめぬ。余は一人  
今は子供のおもむき者  
女と成つた。  
親を遣付けあきやア死ぬきせし

\* \* \* \* \*

5  
待遠く、男は月を斬り、  
居る水兵、  
今子を水兵の  
物船と

と出まゝに各艦の間を通つて行く、その艦で  
皆空飛ぶ、我々の出まゝするのを送る、岸の街  
のて居て、拍手して行を打ん、その声、誰の声か  
死んで来い、と云ふ語が聴えた。  
司令塔の中にある余の胸が凍り、動く。神めは艦の  
動揺のともなう、わが実、はたうをあらわ、何くそッ!!  
と思つた、とんで、仕まつた。  
湾の東口の防林近くは、第三水雷艦隊の集會点だ。  
此所は我々の行く所、既に他の艦も集つて  
居た。時、維二月、星、雨、霧、深、風、吹、く、平  
か、あり、ロ、ン、チ、天、寒、ふ、と、月、落、ち、水、塊、の、陰、が、ある、の

6  
みだ。  
切符に防林の間、と、真先、地を、進、つ、た、は、いつ  
我々の、ぬ、暗、さ、は、我、の、前、を、認、め、暗、さ、で、ある、の  
四方、手、を、合、ち、え、何、も、ぞ、と、投、索、する、の、思、ひ  
中、の、若、者、は、一、入、で、操、割、の、音、の、低、く、の、浪、を、あ、る  
音、の、低、く、な、れ、と、は、絶、え、ず、我、の、祈、る、事。  
曾、て、学、校、の、居、た、時、は、障、害、部、を、通、り、て、細、の中、へ  
首、を、低、く、し、ん、で、居、る、と、思、ふ、  
と、薄、く、其、感、情、は、今、だ。  
あ、ま、り、は、先、き、み、り、ん、え、ま、く、の、ぞ、我、は、目、を、閉、つ、て、居、る、の





船中の起つた。  
 全く生算みぬ。船は暗礁へ乗掛けたのである。百方  
 手を盡して見ても如何も仕方がない。儘よ如何ある  
 のか、夜が明けたら敵の輪舟が来る。味方は板は  
 ぬらのどちらかだ。ブランデーで飲んでも扶さず  
 せんかと言ふ。銃を傳へた。乗組一同喜んで應じた。何人  
 とそれか。戦艦の中の出来た。吾氣をば多し、  
 銃令を掲げた。物と吾氣が。吾張るん銃令で  
 守る水兵と吾氣ではあいか。  
 それで目が覚めて見ると果てはさうな大きき山の如く

書の内容も、うしろに沈んで居て、頭の上には響く。水兵達は  
 のらぬつ砲めがヒツと、見ると居た。水兵達は  
 目をさへくして居た。眠る。居た。

いづの  
室の可  
を為す  
氣で  
人問  
敵の軍  
艦を  
境  
仕  
（完）

